

各項目の進捗状況と課題、主な論点
 <項目 3・4・5 関係>

(鈴木プラン (要旨) 抜粋)

3. アスリート発掘への支援強化

○日本体育協会の参画

- ・ 都道府県レベルの発掘・種目転向を強力に推進。主としてこれから恒常的なメダル獲得を目指す競技が対象。例えば甲子園やインターハイ等で大会終了を機に引退する選手、ベンチや応援に回った選手などを対象にトライアルを実施。
- ・ 発掘の重要性と手法の普及・定着のため、NFや都道府県を対象としたシンポジウムを全国で開催。

【進捗状況】

- ① 日本スポーツ協会を中心として、①応募→②全国での測定会→③合宿・トレーニングを実施し、④NFの強化・育成コースへと導く、ジャパン・ライジング・スター・プロジェクト (J-STAR プロジェクト) を、平成 29 年から実施。
以降、プロジェクトを通じて、エントリー総数 5,640 名中、国際大会で 9～16 位に入るトップアスリートをパラリンピック競技で 1 名輩出したほか、強化アスリート (パラ 6 名)、育成アスリート (オリ 2 名、パラ 1 名)、ナショナルタレント (オリ 14 名、パラ 21 名) を輩出したものの、特にオリンピック競技においては期待していた結果が得られなかったため、毎年運用の見直しを図りながら実施した。
- ② JSC において、関係団体や地方公共団体、学術研究者を対象とした会議を開催し、アスリート発掘・育成の重要性やその手法に関する、トップコーチや研究者からの知見・ノウハウを共有。
- ③ ワールド・パスウェイ・ネットワーク (地域タレントの発掘・育成に関わる地方公共団体が連携し、地域タレントからナショナルタレントへのパスウェイを構築することを目的に設立) への加盟地域の増加 (R3.5 時点で 38 自治体) により、タレント発掘事業に参画する NF を支援する基盤を強化。
- ④ 科学的な根拠に基づいた競技の普及や選手の発掘・育成・強化を推進するため、オーストラリアにおける、アスリート育成パスウェイを育成の過程に合わせて「**F**oundation、**T**alent、**E**lite、**M**astery」の段階的に分けたフレームワークをもとに、JSC において、日本の競技スポーツの基盤を踏まえたアスリート育成の包括的な枠組みである、日本版 FTEM を開発。
- ⑤ 将来メダル獲得が有望視されるアスリートを、海外リーグやトップレベルの指導者の元に派遣 (5 名の MPA (うち、主要大会で 3 名のメダル獲得者) を輩出)。
- ⑥ 2 大会後のオリンピック・パラリンピック競技大会において、メダル獲得の可能性があるターゲットスポーツを選定し、スポーツ医・科学、情報等を活用した集中的な育成・強化を支援 (5 競技種別で 60 名のメダル・ポテンシャル・アスリート (MPA) を輩出)。

- ⑦ 将来国際競技大会で活躍できる選手育成のため、JOCが主体となり、J-STARプロジェクトからのパスウェイも考慮しつつ、NFの一貫指導システムとの連携により、ジュニア期におけるアスリートを育成するエリートアカデミー事業を実施（toto助成により支援）。

【主な論点】

- (ア)次世代アスリートの発掘における、これまでの取組の成果や課題を踏まえ、オリンピック競技、パラリンピック競技、それぞれにおける発掘の在り方や今後の取組の方向性について、どのように考えるか。
- (イ)潜在能力を生かした競技転向への支援について、現状や今後見直すべき点についてどのように考えるか。また、競技特性を踏まえた、科学的により適切な能力測定・競技選択を行う上で、現状の取組をどう評価し、今後必要な見直しについてどのように考えるか。
- (ウ)次世代アスリートの育成・強化に関して、現状の取組や実態をどのように評価するか。2大会もしくは3大会後を見据えて、今後強化すべき競技や年代、重点的に支援すべき取組について、どのように考えるか。
- (エ)各パスウェイ段階において次世代アスリートを育成する指導者やクラブチーム等の活動の基盤について、現状どのような課題があるか。世界で活躍するトップアスリートにまでNFが責任をもって育成・強化することができるよう、今後どのように取り組むべきか。
- (オ)次世代アスリートの発掘・育成・強化に関して、今後の国の支援の在り方や統括団体、NF、都道府県競技団体(PF)、自治体等の各機関の役割について、どのように考えるか。

4. 女性アスリートへの支援強化

- ・ 女性競技に不足している高水準の競技大会の実施やエリートコーチ育成のためのプログラムを実施し、得られた知見をNFに提供。
- ・ 妊娠・出産を含む女性特有の課題に対応した医・科学サポートのためのプログラムを充実し、得られた知見をNFに提供。ハイパフォーマンスセンターによるNFの巡回サポートを実施。

【進捗状況】

- ① 2016年度～2019年度までに、5競技（7人制ラグビーフットボール、ハンドボール、車いすバスケットボール、スキー/スノーボード、アイスホッケー）を対象にプログラムを実施し、高水準の競技大会の機会を創出。各プログラム参加選手が、国際大会にて金メダルを獲得し、国際競技力向上に貢献。（ローザンヌユースオリンピック（2020年1月開催）において、スノーボード・ビッグエアの選手、（プログラム参加者15名を含む）アイスホッケー女子日本代表が優勝。）
- ② 競技引退後にコーチになるための、女性コーチ育成プログラムを構築（9競技18名の女性コーチを育成。受講生から1名の日本代表監督も誕生。）
- ③ 月経異常や産後の競技復帰に向けた医・科学的な支援プログラムおよび調査研究を実施（2016～2020年度において、調査研究では23の課題・テーマを実施）しており、今後はその成果・知見について、女性アスリートや指導者への普及や活用促進が課題。また、HPSCでは婦人科外来を月4回実施するほか、女性アスリート専用の相談窓口を設置（2012年7月～）しているが、相談件数は、年間16件（2020年実績）にとどまる。
- ④ 成長期の女性アスリート等を対象に、月経やコンディショニングに関する講習会を実施。
- ⑤ 妊娠・出産後に競技復帰を目指す女性アスリートを栄養・心理・トレーニング等から包括的に支援するモデルプログラムを実施したほか、地方で活動する女性アスリートのために、JSCと地域が連携した支援体制を構築し、地域の専門家へノウハウを伝達。また、育児と競技を両立するアスリートを抱える、カーリングやセーリングのNFに対して知見を展開するとともに、子どもの遠征費やシッター派遣の費用を支援するプログラムを実施。

【主な論点】

- (ア)女性アスリートへの支援に関し、これまでの取組の成果や現状認識、課題について、どのように考えるか。今後見直すべき点や、新たに留意すべき点はあるか。
- (イ)これまでの取組を踏まえ、女性アスリートの競技環境を整備するために、強化・育成の現場（や地域、学校等）への知見の普及・展開をどのように進めていくべきか。留意すべき点や工夫すべき点はあるか。また、女性アスリートを指導する男性コーチ等の理解促進をどのように進めていくべきか。
- (ウ)女性アスリートの支援について、パラリンピック競技特有の課題はあるか。
- (エ)女性アスリートに特化した戦略的な強化・支援の是非やあり方について、どのように考えるか。

5. ハイパフォーマンス統括人材育成への支援強化

- ・ 世界各国の競技水準を見極め、国際舞台で活躍できる世界トップレベルのコーチであるワールドクラスコーチと、IFのルール変更等に参画するなどの研鑽を積みつつ、強化現場の代表としてNFの運営に関与するハイパフォーマンスディレクターを育成するためのプログラムを実施。得られた知見をNFに提供。

【進捗状況】

- ① 2017年度から2020年度までに、JSCにおいて、JOC・JPC・JSPO・NF・大学等によるコンソーシアム（ハイパフォーマンス統括人材育成推進会議）を設置し、ワールドクラスコーチやハイパフォーマンスディレクターにおける資質能力の分析等を行い、オーストラリアスポーツ研究所（AIS）と連携した国外でのOJTを含む、ハイパフォーマンス統括人材育成プログラムを構築（受講生（計20名）からIFの理事が誕生（1名））。
- ② 指導者の育成・資質向上のため、JOCによるナショナルコーチアカデミー、国際人材養成アカデミー、JSPO・JPSAによる指導者養成講習会等を実施（国費やtoto助成により支援）

【主な論点】

- (ア)2020年度までに構築されたハイパフォーマンス統括人材の育成プログラムについて、今後どのようにハイパフォーマンスディレクターやワールドクラスコーチの育成に活用し、人材育成を進めていくべきか。各関係機関等（JSC、統括団体、NF、PF等）が今後果たすべき役割をどう考えるか。
- (イ)各NFにおける、ハイパフォーマンスディレクター等の更なる配置促進について、どのように考えるか。強化現場の現状を踏まえた課題や留意すべき点などはあるか。
- (ウ)各統括団体が実施する、競技力向上の観点からの指導者育成・資質向上のための研修等について、見直すべき点や新たに留意すべき点はあるか。特に、ジュニア段階の指導者も含めた一貫した指導者育成のために統括団体やNFが果たすべき役割等について、どのように考えるか。